

2025/12/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報十二月号 道について

目次

- ・ 生きる、命を満足させる
- ・ 道の本義
- ・ 起点としての初心
- ・ 終わりのなき本質
- ・ 欲と志の馴致
- ・ 己の性に従う
- ・ 学問と修練
- ・ 至高への歩み

今年もあと一か月だ。改めて「道」について話したいと思った。生きるとは何か、道とは何かを一緒に考えてみたい。美学とロマンを抱き、強く優しく生きるという来年以降に向けての決意表明でもある。

● 生きる、命を満足させる

「5≡響創マンガラ」の構造と秩序を基にすれば、「生きる、命を満足させる」とはどういうことになるのか（最終ページの図を掲載）。

- ① 生命力と、己の世界観や人間観や死生観等を基礎とした自らの信念や覚悟のもと、
- ② 時間（その本質は変化であり、陰陽の交錯による破壊と創造の往還）と、
- ③ 空間（その本質は自己と他己との繋がりと共に鳴による響創）の中で、
- ④ 己の志や目標へと方向性を定めた、
- ⑤ 自らの在り方（美学とロマン）と行動（歩み）である。

少し補足する。構造上、⑤「自らの在り方と行動」は、①「己の生命力と世界観を基にした信念や覚悟」に支えられる。他者の「いいね」が支えるのではない。また、己の行動は、④己の志や目標を明確にしなければ、その先に在る至高へは向かわない。そして、この世界において人間は、②「時間」と③「空間」の間で生きる。時間の本質とは変化であり、変化の本質は陰陽の交錯、つまり破壊と創造の往還である。空間の本質は他己との繋がりによる共鳴であり、共鳴を起こすには少なくともお互いが自立していることが必要である。どう共鳴するかとは、換言すれば、自らをどう響かせるかである。自ら響くことで共鳴を起こすのである。その先にあるのが響創（お互い

の響き合いによる創造」の道である。従って、②の本質である変化（破壊と創造）を拒もうとする努力や、③の本質である関係性（共鳴）を軽視しては、響創の流れをつくり出すことが難しい。この「5≡響創マングラ」は、構造と秩序という観点から、厳粛にこの世界も人生も示してくれるので、とても気に入っている。

それでは今月の本題。道について。

●道の本義―道は外にあらす。命の奮いが道となる。己の命・性に従う
生きるには道が欠かせない。道とは何か。在る地点から移動して別の地点に行くまでの経路である。従って、道は遠くにあるものではない。今この地点から歩むことが道であり、学ぶことも、行うことも、命を燃やすことも、すべてが道の一部である。人は生まれながらに、己の性と命の律動を与えられている。その律動に耳を傾け、誠を尽くして歩むとき、その人の存在そのものが「道」となる。

●起点としての初心―初心は焰。覚悟が道を点ずる

道とは、歩む者の血と魂が刻む軌跡である。それは天地の外にあるものではなく、人間の内奥に潜む「命の起動」そのものである。道の起点は初心にある。初心とは、何者かになろうとする未熟な願いではない。それは「この命を生かし、命を使い切り、命を満足させる」という、根源的な覚悟の火である。決意の火が灯った瞬間に、己の道は始まる。葉隠はこれを「武士道とは死ぬことと見つけたり」「男は命を惜しまぬに極まりたり」と言った。

道は与えられるものではない。己の命を賭して切り拓くものだ。ゆえに、道を問うとは、己の命の使い方を問うことである。命の奮い（覚悟）が道を生む。

自分の拠り所は自分の命、自分の性（個性）、自分の信念、そして志である。そこに拠って立つのである。人はその火を灯した瞬間から、すでに道の上にある。道に終わりはなく。続いていくことこそが、道の本質である。もつと言え、道は空いていてこそである。渋滞の道は本来ではない。道は各々が歩むものである。己の道は己独りで歩む覚悟が必要だ。「いいね」の数を気にしては歩めない。他者や世間の価値に無闇に従うことは、己の道を濁らせる。

●終わりのなき本質―道に終わりなし。至高のみ在る

道には終点も到達もない。続いていくことこそが、道の本質である。到達という言葉は、道の辞書にはない。ただ「至高」や「絶点」があるのみ。これらは、到ることを許さぬ高みであるがゆえに、歩ませ続ける原動である。それは永遠に己を超えんとする志の象徴だ。ゆえに歩む者は終わりを求めず、ただ至高や絶点を仰ぎて進む。その果てなき歩みこそ、命を生き切るということだ。

●欲と志の馴致―欲は焰、志は鋼。馴致して剣とせよ

欲は人間の燃料である。だが、欲が己を支配するならば、命は濁る。もし欲が志を曇らせるなら、それは命を濁らせる毒となる。しかし欲は燃料だ。ゆえに、欲を滅するのではなく、志に仕えさせるがよい。欲が至高を仰ぎ、志に従うとき、それは野性の力として輝き、命の推進力となる。この「欲の馴致」こそ、道を歩む者の根幹の修練である。欲を志の剣に鍛え直したとき、人は自由となる。

●己の性に従う―己の性に背くな。性こそ天命の形なり

道は万人に一つではない。それぞれの命には、それぞれの性（さが）がある。己の性に従い、己の興味、己の好きを貫いて歩むことが己の道である。従って道は人の数だけある。命が自然に燃える方向へ進む、それが天命に沿うことだ。どの道を歩もうと、命を使い切らんとする覚悟があれば、辿り着く至高は同じ方向に在る。剣を執る者も、筆を執る者も、命を燃やす一点において等しい。

己の道を歩むには勇気が必要となる。強くなくては（己の人生を）生きていけない。臆病を選んで日和った連中は己の道を降りたのだ。人真似ばかりしている連中は己の道を放棄したのだ。中庸に「天が命ずる之を性と言い、性に従う之を道と言い：」とある。己の性に背くな。性こそ天命の形である。己の命の性が燃える方向へ進み、命をこの世に様々に具現化していく、それが天の意に沿うということだ。大学にも「意を誠にするとは、自らを欺くなきなり」とある。自らを弱くしたり、欺いたりしてはならない。自らを生き切るという覚悟、そして己の道を行くという勇気と姿勢こそが肝要である。

●学問と修練―学は道の伴侶、行は道の証

学問とは、己の道を修めるための鍛錬である。学とは、知識を集めることではない。己の歩む道をより深く、正確に、そして雄々しく進むための整法である。学問とは、己の道を歩むための手段である。前述した中庸も「天が命ずる之を性と言い、性に従う之を道と言い、道を修める之を教（学問）と言う」と説く。

時間は有限である。闇雲に学ぶことは、知を積むどころか、己の道を歩む足を鈍らせる。真の学問は、量ではなく、道を歩むための選択と集中にある。知識の誘惑や慢心に勝ち、己の志と信念を照らす知を取り入れる者は、学人たり得る。学を以て己を律し、命を整え、己の道を伸ばしていくことが肝要である。知は行を導き、行は知を証す。この二つが融け合うとき、道が立ち現れる。学問は道を磨く刃となり、道の歩みを助ける。

学んだ知は、行われて初めて命となる。知識は灯であり、行は大きな火である。灯だけでは暗闇を照らせない。行とは、己の信念を現実に刻むことである。恐れや怠惰に勝ち、未完成でも一步を踏み出す覚悟こそが問われる。行動を伴わぬ知は腐る。知を血肉に変え、己の肉体と心に刻むことで、道は現実に現れる。行を以て学を試し、己の命を燃やすこと。それが肝要である。

●至高への歩み―道は終わらず、命は創造の流れと共に在る。命を燃やせ
 道とは、命を至高や絶点に向けて使い切る歩みである。その歩みそのものが、すでに無限である。学は命の理を磨き、行は理を現実に刻む。そして命は、学と行を超えて創造そのものとなる。恐れ、痛み、過去のすべてを道の一部として受け入れ、己の信念と志と愛を携えて歩み続ける（運命愛）。それが道を生きるということである。己の命を燃やし尽くす。その炎こそが、次の時代を照らす光となる。

従って、命は燃え尽きることで完成する。学に磨かれ、行に試された命は、やがて自身を超えて響創の道と融け合う。完成とは静止ではなく、永遠の運動である。己の志と愛、行動の全てを以て、他己と響き合う命となるとき、人は道そのものとなり、個を超えた生命の一部として生きる。

死を恐れることなく、有限性の幻影に打ち勝ち、命を燃やし尽くすこと。それこそが、再生であり、永遠の創造（響創）である。

ゆえに、道を歩む者は問うな。「どこまで行けばよいか」と。問うべきはただ一つ、「命を使い切っているか」である。この問いに誠実である者のみが、真に道を歩む資格を持つ。葉隠はこれを「毎朝毎夕、改めては死に改めては死ぬ」「必死の観念、一日仕切りなるべし（覚悟を決めた心で一日のリーダーシップをとれ）」「本気にて大業は成らず。氣違ひにて死狂いするまでなり」と説く。

道は外にあらず。その時その時の命の燃焼そのものが、すなわち道である。

向かう姿勢	④己の志や目標	具現化
③空間 →共鳴。 自己と他己との繋がり と、共鳴による響創	【生きる/命を満足させる】 ⑤自らの在り方/ 行動 美学とロマン	②時間 →変化。 陰陽の交錯による破壊と創造の往還
欲望/興味/熱意	①生命力と、己の世界観や人間観や死生観等を基礎とした、自らの信念や覚悟等	智慧

今月も健康と健闘を。